

[学術論文]

「朝倉の梯子獅子」の伝承を担う青年組織の再構成

Reconstruction of Youth Organization in Asakura for “Hashigo - jishi”,
a traditional lion dance performed on ladders

牧野 由佳

Yuka MAKINO

Studies in Humanities and Cultures

No. 30

名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』抜刷 30号

2018年7月

GRADUATE SCHOOL OF HUMANITIES AND SOCIAL SCIENCES

NAGOYA CITY UNIVERSITY
NAGOYA JAPAN

JULY 2018

〔学術論文〕

「朝倉の梯子獅子」の伝承を担う青年組織の再構成

Reconstruction of Youth Organization in Asakura for “Hashigo - jishi”, a traditional lion dance performed on ladders

牧野由佳
Yuka MAKINO

はじめに

- 1 「朝倉の梯子獅子」の保存会関係組織の現状
 - 1-1 保存会組織
 - 1-2 担い手の移り変わり
- 2 伝承者としての青年組織の再構成
 - 2-1 朝倉における青年組織の変遷
 - 2-2 青年組織の再構成の様相と形態的特徴

おわりに

要旨

現在、多くの祭りや民俗芸能の現場においては、少子化や過疎化、さらに若者の関心がそれらに向かないことによる担い手不足が起きている。氏神の祭祀や民俗芸能は、以前は若衆組や青年団といった青年組織が担う場合が多かったが、現在は高齢者が祭りを運営したり、子ども会との連携によって担い手を維持する地域が増えてきている。そのような中、愛知県知多市で継承される「朝倉の梯子獅子」は、現在も青年組織が演技等の担い手の中心として活動をしている。だが、朝倉の青年組織の形態はこれまで変化せず維持されてきたのではなく、社会情勢等に影響を受けつつ、柔軟に対応し、組織を再構成しながら現在に至っている。本稿は、その朝倉の青年組織の再構成の様相を示し、形態的特徴を明らかにしようとしたものである。

キーワード

梯子獅子、民俗芸能、青年組織、民俗芸能保存会、伝承

はじめに

愛知県知多市にかつて朝倉村と呼ばれた地域がある。西は伊勢湾に面し、東南には丘陵地が連なる地域であり、漁業と農業を生業としていた。この地には、朝倉の梯子獅子という民俗芸能が伝承されている。朝倉の梯子獅子は、現在は毎年10月第一日曜日に牟山神社の神事として奉納されている。高さ約9メートルの檣上と37段の梯



写真1 檣上で舞う獅子

子¹で、獅子頭（演者をカブという）と胴身（演者をウスという）の二人一組の獅子がお囃子に合わせ曲芸的なはなれ技を演技する芸能で、担い手である青年たちのスリルのある演技は観客を魅了している。伝承では慶長4（1599）年頃から奉納されているとされており、1959（昭和34）年には、愛知県無形文化財（のちに文化財保護法改正により県指定無形民俗文化財となる）の指定を受けた。

朝倉の梯子獅子に関する調査・先行研究は、知多市教育委員会編『知多市文化財資料集第11集 朝倉の梯子獅子』や、知多市誌編さん委員会編『知多市誌』などを挙げるができるが、それ以来、網羅的な調査は30年以上なされてこなかった。

この朝倉の梯子獅子の演技等の担い手組織は、昭和30年代後半までは朝倉青年団（さらに遡ると若衆組）であったが、昭和38年に朝倉青年団が解散すると、朝倉梯子獅子保存会の中に朝倉青年会が作られ担い手となる。さらに、朝倉青年会の活動を支えるOBで構成する朝倉梯子獅子同好会が結成されていく。

このように、社会情勢等の変化に伴う青年組織の縮小（人数減少）によって、演者である青年たちを支援する組織が形作られたかのように見える。しかし筆者は、朝倉の担い手組織の構成は、所属年齢が拡大し再構成されたものとする。本稿では、筆者による2014（平成26）年から2017（平成29）年にわたる朝倉の梯子獅子に関する調査によってみてきた、民俗芸能を伝承する者たちが社会の変化による担い手不足の問題に直面した際の対応の一事例として、朝倉の青年組織の再構成の様相と形態的特徴を提示したい。

1 「朝倉の梯子獅子」の保存会関係組織の現状

1-1 保存会組織

現在、朝倉の梯子獅子を伝承する組織として、朝倉梯子獅子保存会がある。後述のように、朝倉梯子獅子保存会の構成員は、演技や囃子といった民俗芸能の担い手だけでなく、知多市長や朝倉地区の役員なども含まれている。そして実際の担い手たちは保存会の中に下部組織を作り活動している。本節では、現在の朝倉の梯子獅子を伝承していくための組織について述べる。

朝倉梯子獅子保存会

現在の朝倉の梯子獅子は「朝倉梯子獅子保存会」（以下、「保存会」とする）が全体を取りまとめている。2014（平成26）年度は、計96名で構成されており、その構成員としては知多市長（名誉会長として）や保存会長、神社宮司（牟山神社神職は、現在は知多市八幡の尾張八幡神社宮司に依頼する形を取っている。）、朝倉地区の役員などもいる。また、後述の実際に演技をする朝倉青年会、朝倉梯子獅子同好会も会員に含まれている。会長は、梯子



写真2 舞台上に登場する獅子



写真3 梯子を使った演技
(運勢の舞)

獅子を経験したことのある方が、おおむね3年任期で務める。こうした保存会長の仕組みはおよそ30年前から始められ、それ以前は組長もしくは区長となった方が兼務していたという。保存会の役割は、補助金等に関する市との連絡調整、宣伝用ポスターの作成や経理などの事務処理などで、演技をする青年たちの支援をする。保存会の設立年は聞き取り調査をしてもはっきりとはしないが、県の文化財指定を機に作られたようである。当時の氏子総代が記した牟山神社の日記（昭和28年～38年版・牟山神社所蔵）において初めて保存会の文字が登場するのは、文化財指定される前年の昭和33年9月28日であり、少なくとも昭和33年には組織されていたものと考えられる。日記によると、この日県文化係より梯子獅子の調査の申し出があり、受入の相談協議会を開催したようである。ただ、梯子獅子経験者の山口幸治氏（昭和21年生）と月東金男氏（昭和21年生）によると、保存会は文化財指定に合わせて作られたものの、当時の運営状況は、梯子獅子に関しては朝倉青年団が行い、祭り全体に関しては神社の氏子総代がすべてを執り行っており、今のように保存会員として年配者や地区役員が総出で祭りに関わるということではなかったという。保存会が運営面で実際に機能し始めたのは、1963（昭和38）年の正月に朝倉青年団が解散してからである。

朝倉青年会

朝倉青年会（以下、「青年会」とする）は、獅子を実際に披露する方々である。朝倉青年会の結成は、朝倉青年団が解散した1963（昭和38）年である。青年会の代表者は祭礼部長といい、青年会員の最年長者が担う。現在の入会の条件は、15歳（高校1年生の年齢の者）から24歳の知多市内の男子であること。以前は朝倉地区の青年だけに限定していたが、1983（昭和58）年頃から知多市内他地区の青年も参加可能となり、実際に八幡や古見、佐布里などから集まるようになった。地区内の担い手候補が減少したことが、他地区から募集し始めた理由である。2014（平成26）年の朝倉青年会会員は10人であった。彼らには、組織内でも入会年数によって階梯がしかれており、1年目は、掃除や梯子・櫓の雑巾がけや塩撒きを担当し、獅子役の先輩のサポートをする。そして、2年目以降に初めて獅子を披露することができる。しかし、以前は、1年目は雑巾がけを担当、2年目は塩まきを担当、3年目によく獅子を舞わせてもらった。（知多市誌編さん委員会編 1983；98）



写真4 昭和45年「ふるさとの歌まつり」出演時の青年団員と保存会員（牟山神社提供）

60～80歳代の方に話を伺うと「自分たちの頃は、梯子獅子をやりたいやりにたくないということじゃなくて、村のその年頃の者は皆やった。多いときは30人くらいおって、急いでやっても（一組の演技が）20分、夜の11時くらいまでかかっていた。最後の方は観客がほとんどおらんかった」と話す。

朝倉梯子獅子同好会

朝倉梯子獅子同好会（以下、「同好会」とする）は、主に梯子獅子の経験者で構成されており青年会引退後に多くの方が入会する。青年が多かった時代は祭りの運営はすべて青年会でやってきたが、現在の青年会だけでは人数不足で行うことができないため、同好会が様々なサポートをしている。祭り当日は、主に同好会員が囃子を担当する（手の空いた青年たちも囃子をする）。また、練習の際の指導、櫓を組む際の指導、子ども獅子の運営と指導、子ども会の獅子巡行の運営などを行い、青年会とともに過ごすことが多い。また、青年会の獅子の担い手不足から、同好会になっても獅子を続けている人も数名いる。年齢制限は現段階において設けていない。



写真5 囃子の練習をする青年会員と同好会員

1-2 担い手の移り変わり

次に、各行事を担った組織の移り変わりについて考えたい。以前は、ほとんどの行事を青年団（若い衆）が担い、宮上りや式典などに組長や氏子総代たちが参加する形を取っていたことが、聞き取り調査や既に示した傘山神社の日記から分かっている。また、年配者に話を伺うと「保存会設立前は青年団が何から何までやって、梯子獅子だけでなく、境内西に別に舞台を作って芝居をした」という。

しかし、現在は表1にあるように、青年団を前身とする青年会だけが祭りの運営を行うのではなく、保存会、青年会、同好会、氏子総代、子ども会が参加しており、特に、保存会、同好会は、青年会とともにかなり多くの場



写真6 昭和30年前後の青年団の芝居（昭和7年生まれの方提供、大祭時のものかは不明）

で関わっている。例えば、例祭前日と当日の朝に行う轍起こしは、以前は青年団のみで行っていたが、現在は青年会・同好会・保存会が総出で行う。また、宮上り、宮下りも同好会なしには成立しない行事である。これは青年会の人員不足・担い手の職業の変化など社会情勢の変化が原因であると考えられる。その解決策として経験者（同好会）や地域の役員が皆で支援することで祭りを成り立たせているのである。そのような中でも、梯子獅子の演技は主に青年会の会員が担い続けている。

次章では、担い手の中心をなす青年組織についてさらに詳しく考察する。

「朝倉の梯子獅子」の伝承を担う青年組織の再構成（牧野 由佳）

日付	時間	内容	担い手
例祭前日 (試案祭)	午前6時	ヨビダイコの後、全員で5本の櫓を起こす「櫓起こし」	青年会、同好会、保存会
		境内の櫓と舞台を飾りつける、その他祭りの諸準備	櫓は青年会、同好会 舞台は保存会のうち朝倉協議会 拝殿は氏子総代
	午後3時30分	獅子櫓御祈禱、櫓の大麻を取り替え (八幡神社より禰宜を招く)	保存会長、青年会長、同好会長、青年会員、氏子総代、 コミュニティ会長、各組長
	午後4時30分頃	櫓を倒す	青年会、同好会、保存会
	午後6時	ヨビダイコの後、囃子を上げる (二班に分かれ保存会館から牟山神社へ)	提灯を持ち先頭を歩く:保存会長、各組長 お囃子:青年会、同好会、氏子総代 他、保存会員も参加
	午後7時	梯子獅子奉納(試案)	獅子:青年会、お囃子:同好会
	午後7時30分	お神楽奉納	小学3・4年女子児童、 指導者(同好会兼務者)
	午後9時	ヨビダイコの後、囃子を下げる (牟山神社拝殿前～鳥居外へ)	保存会長、各組長、氏子総代 お囃子:青年会、同好会 他、保存会員も参加
大祭当日 (本案)	午前6時	ヨビダイコの後、全員で5本の櫓を起こす「櫓起こし」	青年会、同好会、保存会
	午前8時15分	ヨビダイコの後、お囃子区内巡行 (二班に分かれ、保存会館から区内、牟山神社へ。班ごとに分かれ別のルートを巡行)	先頭を歩く:保存会長、各組長 お囃子:青年会、同好会 その他、字議員や民生委員も参加 氏子総代
	午前10時	式典 (八幡神社宮司による祝詞・ご祈禱)	保存会長、青年会祭礼部長、同好会長、組長、市長、教育長、消防署長、国会議員、県会議員、市内企業関係者、氏子総代
	午前9時30分～ 10時15分頃	子ども獅子地区内巡行。 5つの子ども会が各々に獅子を持って牟山神社へ その後参拝	子ども会、同好会
	午前11時頃	梯子獅子奉納(いわゆる「本当の奉納獅子」1組のみ)	獅子:青年会、お囃子:同好会
	午前11時20分	お神楽奉納	小学3・4年生女子児童、 指導者(同好会兼務者が多い)
	午後1時頃	梯子獅子奉納(合間に子ども獅子を奉納)	獅子:青年会、お囃子:同好会 子ども獅子
	午後2時頃	お神楽奉納	小学3・4年生女子児童、 指導者(同好会兼務者が多い)
	午後3時頃	ご神体の宝剣手入れ	Hさん(朝倉の刀剣を扱える方)
	午後3時30分	櫓を倒す(強風のため早めに倒した)	青年会、同好会、保存会
	午後4時頃	囃子下げる	保存会長、各組長、氏子総代 お囃子:青年会、同好会
	午後6時	囃子を上げる	先頭を歩く:保存会長、各組長 お囃子:青年会、同好会 その他、字議員や民生委員も参加 氏子総代
	午後7時	梯子獅子奉納	獅子:青年会、お囃子:同好会
	午後7時30分	お神楽奉納	小学3・4年生女子児童、 指導者(同好会兼務者が多い)
	午後10時頃	獅子終了後、囃子を下げる	保存会長、各組長、氏子総代 お囃子:青年会、同好会
		櫓片づけ	全員

※保存会作成の日程表を参考に、聞き取り・参与観察のうえ筆者が作成した。

表1 2015(平成27)年 試案・牟山神社大祭の日程と担い手

2 伝承者としての青年組織の再構成

すでに述べたとおり、朝倉では1963（昭和38）年に青年団が解散した後、保存会の下部組織である朝倉青年会（以下、青年会とする）を組織し、朝倉の梯子獅子を担うための活動やその他牟山神社の行事に参加している。青年会員はここ数年10人前後を推移しており、朝倉地区の方が全員強制的に参加していた青年団解散前と比較するとはるかに人数は減少している傾向にある。

このような縮小傾向にある青年組織は全国をみても珍しいものではなく、むしろ消滅しているものも多い。また、祭りの担い手組織については、青年組織の消滅や縮小によって青年という枠組みから離れ、幅広い年代で組織される傾向にあり、特にお囃子の伝承で増加傾向にある事例としては、定年退職後の年配層が小中学生を指導する場合である。例えば、朝倉と同じ梯子獅子を行う愛知県豊明市の大脇の梯子獅子の現場では、古くは青年組織が主な担い手として活動していたが、現在は高校生など若手も参加する一方で30歳代後半や40歳代の方が演者の中心的存在として活動しており、幅広い世代が担い手として活躍している。

朝倉の場合は、10歳代後半から20歳代前半の若衆組や青年団を母体とした青年組織が梯子獅子を担ってきたという伝統的な点に重きを置き、演技面の中核をなす青年会の構成員は16歳～24歳としている。実際、梯子獅子が高所で非常にアクロバティックな演技をするので体力的な問題もあるため、青年団の年齢層が担い手となるのが好ましいとされ、さらに青年団解散当時の昭和30年代末に一部の青年たちの希望があつて祭りの担い手としての青年組織を残しながら今に続いている。

このような状況下で、朝倉の梯子獅子の担い手青年組織はどのような形態的特徴を持っているのであろうか。筆者は、朝倉における青年組織は一見「名称は変わっても年齢層などの形は一貫して変わらない組織として継続し、現在は縮小傾向にある」と思われがちであるが、そうではなく「社会情勢の変化による危機的状況を脱するために組織構成の変化を繰り返し、年齢層なども拡大しながらひとつのまとまりとしての組織を継続し、さらにその中に新たな階梯が発生している組織」であると考えられる。

2-1 朝倉における青年組織の変遷

本調査で聞き取りができた最年長の方が大正13年生まれの方のため、戦中～戦後の青年団までしか翻って把握することができなかった。そのため、ここでは(1)戦中～戦後（昭和37年まで・青年団時代）、(2)青年団解散後（昭和38年以降）、(3)昭和40年代後半以降（OBも獅子をやるようになった頃）、(4)昭和50年代後半以降、の4段階に分けて考える（図1）。

まず、(1)戦中～戦後（昭和37年まで）は、青年団の時代であった。時代によって入団や退団時期は多少異なるが、朝倉の男子全員が数え15・16歳に入団し、数え24・25歳頃に退団することとなっていた。時代によっては所属期間が10年ほどの頃もあったが、昭和30年代後半には高校1年生の年から9年間行うという形が一般化していた。この頃の青年団には組織内階梯もあり、入団したての1・2年目は幼年部（小若い衆）と呼ばれ、特に、1年目は雑巾がけ、2年目は塩まきという役割を担った。また、3年目になるとようやく獅子を舞うことができるようになり、アガリといった。（知多市誌編さん委員会編1983：98）最年長の代表者が青年団長を担い、退団したOBたちは、基本的に青年団には関わらなくなり、祭りや梯子獅子とも自然と距離を置くようになった。

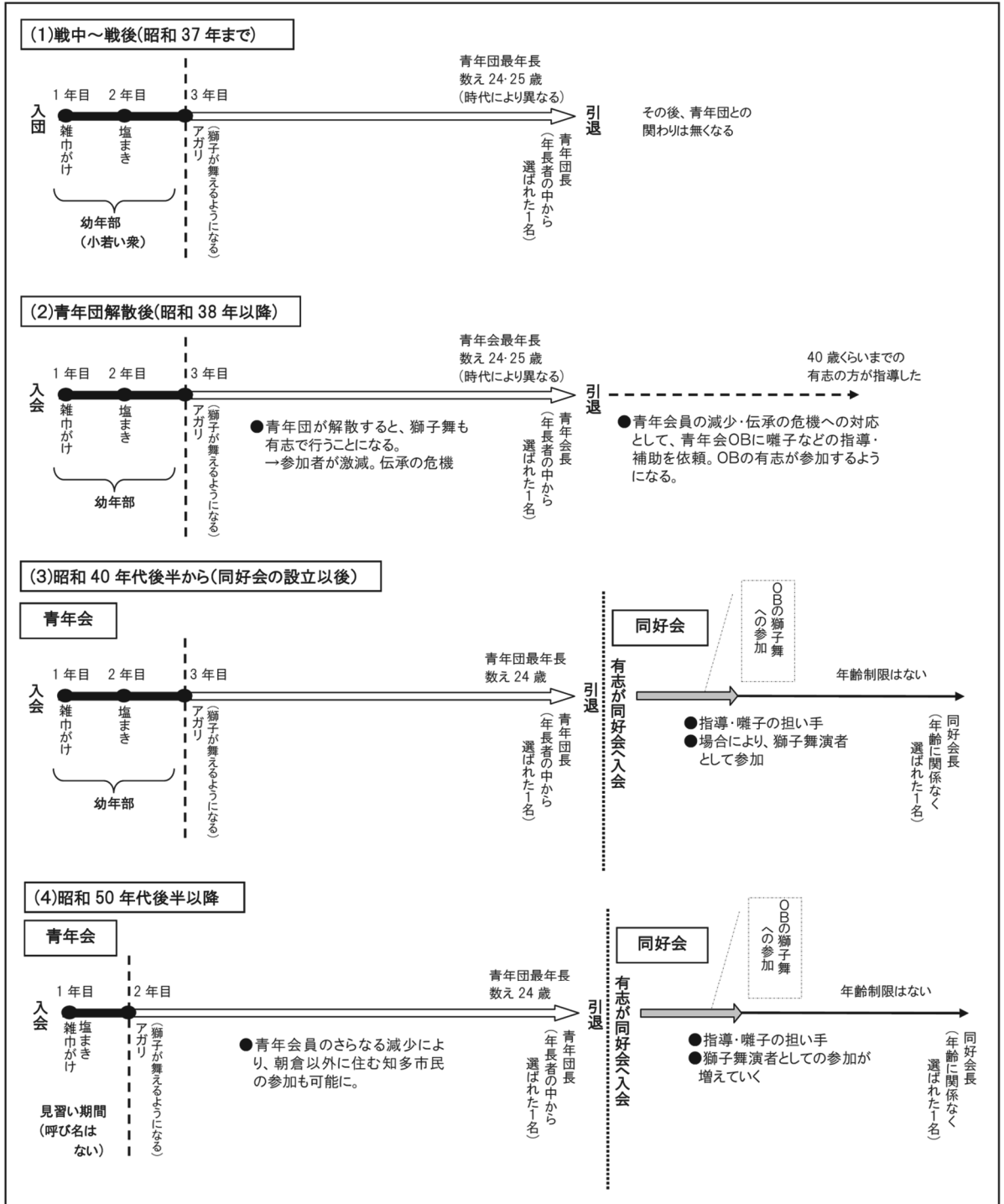


図 1：青年組織の変遷

昭和34年には朝倉の梯子獅子は文化財指定され、当時はまだ実質的に機能していなかったが朝倉梯子獅子保存会が結成された。また、この昭和34年は伊勢湾台風が起こる年であり、以降、当時の知多町沿岸部は埋め立てされはじめ名古屋港の一部として工業化していくこととなる。

(2)青年団解散後(昭和38年以降)の青年組織は、朝倉の男子全員が必ず参加するものではなく希望者のみが集まる形となったので人数は激減したが、組織形態としては変更なく続いた。ただ、本囃子の伝承などに不安を覚えた青年たちが、指導してもらうよう先輩を呼び、練習に参加してもらっていたようだ。その青年たちに声を掛けられた先輩の一人が山本一久氏(昭和15年生)であった。演技指導者はおおよそ40歳くらいまでの方々だったそうである。この頃から先輩たちと青年が一緒になって梯子獅子を支えていくようになる。当初はOBたちの組織は無く青年に指導を頼まれ引き受けるという形であったが、数年後の昭和40年代半ばにOBたちによって同好会が組織された。その後は演技や囃子の指導にとどまらず、徐々に祭り本番の囃子も担うようになった。(1)との違いは、青年組織引退後も40歳頃までは指導者・支援者としてゆるやかに青年組織と関わる方が出てきたことである。そして、同好会は次第に囃子の担い手として祭りや青年組織に欠かせない存在となっていった。

さらに、(3)昭和40年代後半以降には、青年組織引退後のOBも獅子をやるようになっていった。昭和25年生まれ近藤茂夫氏は、OBになってから2年獅子を演じた(1973~1974(昭和48~49)年)。また、昭和29年生まれ近藤錦一氏も、獅子が好きだったので、OBでも1年獅子を演じた(1976(昭和51)年)。このようにいくつかの事例を伺った。朝倉の適齢男子が全員青年団に参加していた時代は、獅子を舞いたくても人数が多すぎてできない方もいたほどであったため、OBが獅子を演じるようなことはなかったが、この時代にそれができたのは、青年会員が以前に比べて少なくなったからだろう。その後、演者不足からOBが演じることが増えていくようになった。

(4)昭和50年代後半以降はどのような変化があっただろうか。それは、演者不足により、これまでは1・2年目幼年部、3年目アガリという階梯であったものを、1年目のみを修業期間として幼年部のような仕事を担わせ、2年目からアガリとして演技することを許可するようになった点である。少なくとも『知多市誌』資料編3が発行された1983(昭和58)年以前は旧来どおりだったが(知多市誌編さん委員会編1983:98)、1989(平成元)年から青年会に入会した月東由典氏(昭和49年生)は「2年目から獅子を演じた」と話す。つまり、2年目からアガリとなったのは1984(昭和59)年頃~1989(平成元)年の間と考えられる。

2-2 青年組織の再構成の様相と形態的特徴

大まかに捉えたにすぎないが、青年団の頃から現代までの朝倉における青年組織の変遷は、以上のようになっており、朝倉の青年組織は、青年団時代から形は変わらない組織として継続しているのではなく、社会の変化に対応し変化を繰り返しながら継続していると考えられる。詳しく述べると以下ようになる。(1)を基本形とする。(2)の時期になると、40歳頃までの有志が協力し指導者ができる。この指導者の団体として同好会が設立され、徐々に囃子は基本的には同好会が担うようになると、青年会と同好会はより密な関係になっていき、青年会はたとえ会長であろうと、OBである同好会の会長や会員よりも発言権は劣るようになる。この様相は次のように捉えることも

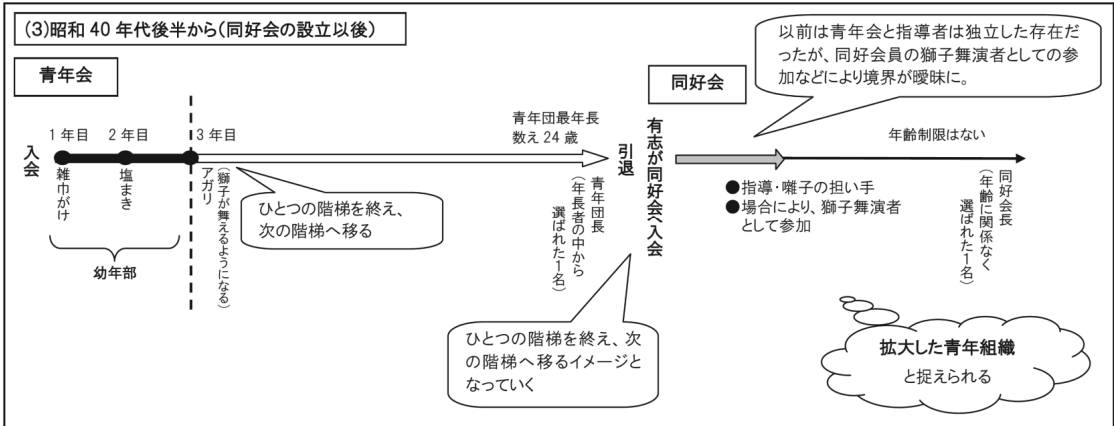


図2：(3)の時期における青年組織の捉え方

できるかもしれない。つまり、青年会と同好会を一貫した青年組織と捉え、青年組織の年齢層の拡大と見ることが出来る。さらに、その中に「同好会」と「青年会」という年齢階梯があり、1・2年目である「幼年部」はさらに細かな下部階梯となる。青年会においても一定の自治権は与えられているが、(1)と比べると自治権の範囲は低下していると考えても現実と乖離してはなからう。加えて(3)の時期になると、獅子を演じる年齢が拡大するようになり、同好会と青年会の関係や境界が一層分かりにくくなる。(だが、表向きの青年会という下部階梯は守られ続ける) (図2)。(4)の時期では、担い手不足によって階梯を一段階消滅させ、簡易な方法を取るようになったことが認められる。

朝倉の青年組織の場合、青年会だけ見ると人数の減少が規模の縮小のように見えてしまうが、実際は青年組織の人数が縮小したわけでもなく、また保存会設立によって青年組織が崩壊したわけでもない。実際は、梯子獅子を運営できる人数を確保するために同好会という名目のもとで組織の年齢層が拡大し、その中で事実上の階梯が作られているのである。朝倉の梯子獅子を執り行うには、場立てや幟起こし、囃子などあらゆる場面で多くの男たちの力が必要であり、特に同好会の存在意義は非常に大きい。彼らがいなくては、今の祭りは間違いなく成り立たない。朝倉の人々は、祭りを維持するため、また朝倉の梯子獅子を伝承するために青年組織の再編成を行った、いわば存続のための工夫の結晶と言えると考えられる。



写真7 幟起こしをする青年会員と保存会員・同好会員

おわりに

以上のように本稿では、愛知県知多市で行われている朝倉の梯子獅子の担い手である青年組織の現状、そして社会変化に伴う青年組織の再構成の様相に関して論じた。

本稿により、民俗芸能を伝承する方たちが担い手不足の問題に直面した際の対応のひとつとして、朝倉では青年組織というかたちを維持しつつも、組織の再構成を試み現状に適応させていることが分かった。また、朝倉の組織では、青年組織の年齢層の拡大とともに年齢階梯の制度も変化しているという形態的特徴を示した。しかし、本稿では、より詳細で周縁的な社会情勢等の変化と青年組織の再構成を関連付けて述べることができなかった。この点に関しては今後の課題としたい。

《注》

- ¹ 朝倉の梯子獅子は「高さ9メートルの櫓と31段の梯子を使った」民俗芸能としてパンフレットなどに記述され、一般に知られてきた。しかし、筆者が調査の際に梯子の段数を数えたところ、37段あることが分かった。これは担い手たち自身も気に留めていなかった方が多かったが、年配者の方の中にはこの経緯をご存知の方がいた。2018年保存会長の近藤博夫氏（昭和28年生）によると、以前は確かに31段の梯子を使用していたが、1970（昭和45）年に37段になったという。同年3月5日に行われたNHK「ふるさとの歌まつり」に出演した際に、会場である愛知県文化講堂へ31段の梯子や柱などすべて通常使うものを持っていったが、梯子や柱が長すぎたために舞台に入れることができなかった。NHK側から柱と梯子を短く切りたいと依頼があり、朝倉の人々もそれを承諾し、梯子と後ろの柱のみ切った。その後新しい梯子と柱に作り替えてもらったが、その作り替えの際に梯子を37段にしたという。6段増やしたことについて月東金男氏（昭和21年生）は「昔は、梯子を立てるときは、いくつもの俵を積んだ上に（31段の）梯子を乗せて高さを出していた。青年はスリルがほしいから、より高くしたいと思っていた」と語る。パンフレットや文献資料の文言は37段になるより以前に作られたもので、その文字化された文言のみ取り残され、朝倉の梯子獅子の常識となってしまっている。31段と書いたのは、「それほど高い梯子を使う」という程度の意味しかなかったはずで、筆者が調査した限りではそれ以上の意味は込められていないようだった。

参考文献

- 愛知県郷土資料刊行会編 1974 『続愛知のむかし話』 愛知県郷土資料刊行会
- 愛知県社会科教育研究会尾張部会編 1992 『尾張のまつり』 浜島書店
- 愛知県小中学校校長会編 1971 『郷土の祭』 愛知県教育振興会
- 知多市教育委員会編 1970 『知多市文化財資料第11集 朝倉の梯子獅子』 知多市教育委員会
- 知多市誌編さん委員会編 1981 『知多市誌』本文編 知多市編さん委員会
- 知多市誌編さん委員会編 1978 『知多市誌』資料編1 知多市編さん委員会
- 知多市誌編さん委員会編 1983 『知多市誌』資料編3 知多市編さん委員会
- 豊明市史編纂委員会編 1988 『豊明市史』資料編5（民俗編） 豊明市役所
- 本田安次 1957 「獅子舞考」（日本民俗学会編『日本民俗学』5(1) 日本民俗学会）
- 本田安次 1998 『本田安次著作集 日本の伝統芸能』第16巻・舞楽・延年Ⅱ 錦正社
- 山口ひな子 1985 「知多市における伝統的な地方芸能 その二—朝倉の梯子獅子とその衣装について—」（中京女子大学編『中京女子大学紀要』第19号 中京女子大学）
- 吉田弘編 2010 『知多半島の民話』 吉田弘

参考資料

- 「牟山神社 日誌」（1922（大正11）年～、1939（昭和14）年～、1953（昭和28）年～）牟山神社蔵

参考URL

- 知多市役所商工振興課ホームページ（知多市内のまつり紹介ページ）
<https://www.city.chita.lg.jp/docs/2013122000429/>（2014年6月19日閲覧）

謝辞

本論文の執筆にあたり、多くの方にご協力をいただきお世話になりました。まず、本稿の調査対象地である愛知県知多市朝倉の皆さんには、長期にわたり調査にご協力いただきました。朝倉梯子獅子保存会をはじめ、朝倉地区の方々のおかげで本調査が実現したと感じております。また、愛知県豊明市大脇の梯子獅子の保存会の皆さんにも快く聞き取り調査にご協力いただきました。ここに厚く感謝の意を表します。本調査により、各地域がそれぞれに祭りや民俗芸能を伝承するために模索し尽力する姿を目の当たりにし、活力をいただきました。